

2017/10/29

「二つの罪」

「だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。死に至る罪があります。この罪については、願うようにとは言いません。」

(I ヨハネ 5:16)

罪には、「死に至る罪」と「死に至らない罪」とがあります。

先週は、神の永遠の契約は二つあるということを知りました。一つは、失われた神との関係を回復し、永遠のいのちを与えるという契約です。もう一つは、神の友となり。神を信頼し愛する関係を築いて平安を得させるという契約です。

罪とは、神様の御心に逆らうことです。つまり、罪を大きく分けると、神との関係を回復させたいという御心に逆らう罪と、神の友となって平安を得させたいという御心に逆らう罪との二つがあるということになります。

聖書は、クリスチャンであっても罪を犯すと語るいっぽうで、クリスチャンは罪を犯さないとも語られています。

「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」(I ヨハネ 1:8)

「もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。」(I ヨハネ 1:10)

「だれでもキリストのうちにとどまる者は、罪のうちは歩みません。罪のうちは歩む者はだれも、キリストを見てもいないし、知ってもいないのです。」(I ヨハネ 3:6)

「だれでも神から生まれた者は、罪のうちは歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちは歩むことができないのです。」(I ヨハネ 3:9)

これらの御言葉は、一見矛盾しているように思われますが、神の契約が二つあり、罪が二つあることを知ると、容易に理解できるのです。

■死に至る罪……ゆるされない罪とは

死に至る罪を理解するためには、人間がどのようなものかを理解する必要があります。

人間は、そもそも神に似たものとして造られ、父・御子・御霊の三位一体の神と意思を共有し、信頼関係の中に生きるものとして造られました。しかし、アダムが罪を犯したために、

その信頼関係が壊れ、人は神との結びつきを失いました。

罪とは、神の御心に逆らうこと、すなわち、神と異なる思いを持つことです。罪を犯すとは、神と異なる思いを選択することです。神に似せて造られたアダムとエバは、本来神と異なる思いを選択することはできませんでした。しかし、悪魔が神と異なる思いを持ち込み、アダムとエバを欺いて、ふたりに神と異なる思いを選択させることに成功したのです。

その結果、神と人との関係は崩壊し、人は神との結びつきを失ってしまいました。これが聖書の教える死です。聖書は、私達のことを死人と呼んでいます。見た目は生きているように見えても、すべての人は必ず朽ち果てる存在です。神との結びつきがないために、人は皆、死んでいるのです。

「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、」(エペソ 2:1)

神との結びつきを失い、すべての人は生まれながらに死んだ者になってしまいました。そこで神様は、もう一度、人との結びつきを回復しようと考え、死を滅ぼすためにこの地上に来てくださいました。それが、イエス・キリストです。

「それが今、私たちの救い主キリスト・イエスの現われによって明らかにされたのです。キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。」

(Ⅱテモテ 1:10)

イエス・キリストは、死んでいる私達を救うためにこの世に来られ、神との結びつきを回復するために死を滅ぼしてくださいました。そして、私達に永遠のいのちを示してくださいましたのです。

この世界は死の世界であり、すべてのものは死に向かっています。聖書は、それを闇と呼びます。闇の中における希望の光、それは、この死の世界との決別です。決別とは、死です。この罪の世界から決別し、いのちの世界に移ること、それが希望になります。

しかし、死んでいる者はもう一度死ぬことはできません。そこで、イエス・キリストが私達に代わって十字架に架かって死に、よみがえって、いのちを示してくださいましたのです。イエス様が死んだのは、よみがえるためです。イエス様は、この世界で死ぬことができた唯一の方であり、この世界と決別できた唯一の方です。

なぜ信じることで救われるのか、それは、十字架に架かって死んでくださったイエス様を信じることで、あなたも十字架と一緒に死ぬことができるからです。十字架で死んでよみがえったイエス様の手を握るなら、私達も、主と共に死んでよみがえることができるのです。

死人にとっての希望は、生きることです。この死の世界で死んで、いのちが与えられることです。イエス・キリストは、ご自分が死んでよみがえることによって、死人が死ぬことをしめてしてくださいました唯一の方であり、その方と結びつくことができれば、私達も生きるのだと教えられました。これが、神が用意してくださった恵みなのです。

「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」(ローマ 6:4-5)

イエス・キリストの十字架は、闇の世界に対して死ぬことができる十字架です。それは、死人にとっての唯一の希望です。ですから、イエス様は、私の手につかまりなさいと、私達の魂に呼びかけておられます。その声に応答して、主の御手につかまるなら、私達は主と共に十字架に架かり、共に死に、よみがえることができます。もし、その御手を拒むなら、私達は死人のままであり、永遠に生きることはできず、やがて土に帰ることになります。つまり、神の御手を拒むことが、死に至る罪であり、赦されない罪なのです。

神から生まれた者は罪を犯すことができないとは、神を信じた者は、神を否定できないという意味です。そういう意味で罪という言葉を使っている箇所もあるし、自分の弱さによって神を信頼しきれないという意味で、罪という言葉を使っている場合もあります。

「最後の審判」という言葉がありますが、聖書が教える最後の審判はあくまでも譬えであり、世の中で使われる最後の審判とは、まったく意味が異なります。というのも、神が死に定めようにも、私達は皆すでに死んでいるので、裁きようがないのです。放っておけば、私達は皆、永遠の死が確定するだけです。ですから、神の裁きとは「救い」のことです。人はすでに裁かれた状態にあり、これから裁かれるのではありません。神様が死人に対してできることは、救うことしかないのです。

イエス様は次のように言われました。

「神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。」(ヨハネ 3:17-18)

人は皆死人であり、すでに裁かれた状態にあります。ですから、神様の目から見ると、人を裁く必要はまったくありません。私達は死人だ、ということがわからないと、赦されない罪を理解することはできません。

■赦される罪とは

クリスチャンは、神を受け入れることによって、神と関わりを持たないという罪からは解放されました。一度神様との関わりを回復した者は、もう神を知らないと言うことはできませんから、そのつながりが切れることはありません。

しかし、神と異なる思いを持ってしまうという罪は、クリスチャンになっても避けられないものです。神との関わりを失った世界には、神の思いとは異なる情報があふれており、私

達は常に選択に迫られています。そのために、死に対して恐れを抱き、お金に目がくらみ、不安を覚えて、人から愛されよう、良く思われようとする生き方から、離れることができません。その結果、自分の内側に嫉妬や怒りが生じます。これはもう構造的な問題であり、誰もここから逃れることはできません。そこで神様は、この罪に関しては、何度でも赦すと言っておられます。

「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」(マルコ 3:28-29)

「聖霊を汚す」とは、神様の呼びかけに対して、救いの御手を拒否することです。そうすると、すでに死んでいる私達は、永遠の死が確定します。しかし、イエス・キリストを受け入れた者が行いや思いの上で犯してしまう罪については、どんな罪も赦していただけます。ですから、イエス・キリストを信じる者が罪を問われることはもうないのです。

「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」
(ローマ 7:24-8:1)

■クリスチャンは罪を放置してもよいのか

神様との関わりを回復した者は罪に定められないのなら、クリスチャンは罪を犯しても構わないのでしょうか。

救いが天国に行くことだけを目指すものであるならば、たとえ罪を放置したとしても、天国に行くことはできますから、放置したければ放置してもかまいません。しかし、それでは平安に生きることはできません。

罪を放置していると、神との関わりを回復してもなお、神と距離を置く関係になります。そうすると、救われていても、見えるものから来る恐れや不安に支配されて生きることになり、この地上で神から来る平安を手にすることができません。

もし今あなたに平安がないなら、それは、放置している罪があるということです。罪は構造的な問題ですから、誰もそこから逃れることはできません。誰もがかかる病気です。イエス・キリストを信じる者は罪に定められることはありませんが、病気を放置していると平安がありませんから、健康に生きたいと願うならば、この罪をなんとかしなければなりません。

「それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。」（ローマ 6:15-16）

「従順の奴隷になって義に至る」とは、行いの義のことであって、神の友と呼ばれる平安を得ることです。神様は、この平安を私達に与えようと計画しておられます。そのために、神様は、私達に罪という病気を排除してほしいのです。

罪の根底にあるのは、こんな自分が愛されるはずがないという思いです。「こんな自分が愛されるはずがない」という思いは、神と異なる思いの中で、最も強力に人を支配しています。私達は、この思いがあるために、人から愛されようとして一生懸命努力して生きています。多くの人はこのような生き方に何の疑問も抱かず、むしろ努力するのは良いことだと思っています。しかし、これこそ罪の本質の根なのです。

人は、人から愛されようとするために、自分と人を比べるようになり、嫉妬するようになり、競争に勝とうとして人を憎むようになり、その苦しみの中でもがいて生きるようになりました。この生き方の根源は、自分が愛されるはずがないという思いなのです。

イエス・キリストは、私達の罪を洗い流すために十字架に架られました。十字架は、この罪の世界に死ぬという希望だけでなく、私はあなたのために十字架に架かるほどにあなたを愛しているという証しでもあります。

イエス・キリストの十字架には様々な意味があります。イエス様は、十字架に架かることによって、あなたの罪を無条件で赦し、あなたを愛していることを示してくださいました。この十字架の意味をどこまで信じていることができるかが、神様への信頼に変わって行きます。信仰を働かせて、こんな罪深い自分であっても無条件で愛されているということを受容できれば、人を無条件で愛せるようになり、怒りや嫉妬から解放されるのです。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」（ローマ 5:8）

イエス様は、私達が罪人であっても死んでくださいました。それほどに、あなたを愛しているということであり、あなたにはそれだけの価値があるということです。神様は、私達の罪は私達のせいではなく、構造上の問題であり、罪は病気であることを、誰よりも知っておられます。そして、神のいのちによって造られた私達の本来の価値は、何も失われていないことを知っておられます。

しかし、人は自分をダメだと思い、人と自分を比べては愛されないと思い、愛されようとして罪を重ねて苦しんでいます。この罪が裁かれることはありませんが、罪を放置して、怒りや妬みをそのままにしておくと平安がなく、苦しみから解放されません。ですから、神様は罪を洗い清めるように言っておられるのです。

あなたが無条件で愛されていることを本当に受け止めるためには、自分の罪に気づいて向き合い、絶望する勇気が必要です。悲しみのないところに喜びはなく、苦しみのないところに希望はありません。まことの悲しみ、苦しみを味わって、初めて希望を見出すことができます。勇気をもって自分の罪と向き合い、十字架の希望を見出しましょう。